巻　頭　言

「十年一日」という表現は，なにかに熱中するか，さもなければ，竜宮城で大もての浦島太郎のように，面白く暮らして時の経つのを忘れた，時間的感覚が極めて短い場合をいう。その反対に，辛い，我慢ができないような時は，1分が1時間にも，2時間にも感じられ，「一日千秋の思い」が，ピタッと頭に浮んでくる。

わたくしは，縁あって城西大学へ創立以来勤務させて頂き，十年に及ぶ今日を回顧するとき，全く短かく感じ，前者の場合の如くである。

しかし，自分を中心にした我儘勝手な，歳月をその時によって長短いずれかに感ずるのと違って，自然は流石に正直なものである。昭和40年の4月，第一回の入学式が終った，休憩の際，カンパして得た資金で木を植えたが，当時，さほど大きくもなかった木々は，いまや亭々として聳え立っているのを見ると，矢張，「十年ひと昔」を感じ，感傷的なものがある。そして，十年は，それ程短い歳月ではないことが分る。

こんな思い出に耽りながら，わが城西大学経済学会と城西経済学会誌とを顧みると，十年間は長く短かく，これまた，感無量ともいうべく，その間の思い出の数々があって尽きるところを知らない。

大学を良くする，ということを分析すれば，いろいろな条件があって，そう気安く出来上るものではあるまい。ただ，われわれ教師の側からいえば，自主的に自己研鑽を加え，まず自らを磨き，預った学生に対して十分な教授訓練を施すことこそ，われわれの唯一の役割であり，またこれが至上命令であろう。

とすれば，自己研鑽の一つの方便ないし手段として，学会誌を持ち，これによって磨かれよう，と志し，昭和40年1月，大学の設置認可があったとき，最初に企図したのがこの城西経済学会誌である。そして，4月の入学式の当日に

は新装をこらした第1巻第1号を出席した多勢の人びとに配布した。

爾来，毎年着実に発行を続け，いままでに一回と雖も休刊したこともなければ，また発行が甚だしく遅延したということもなく，いささか手前味噌の言い分ではあるが，順調の歩みを進めて，ここまで来たのである。

今回，大学十周年記念事業の一環として，その記念号を発刊することのできるのは，当事者として洵に喜びに堪えない。これ偏えに執筆者たちがご苦労を重ねた賜物であり，また，この号を出版するにあたって，多額の費用を惜しみなく拠出して頂いた理事者たちのご厚意に深甚の感謝の意をこめて，御礼を申し上げたい。

寡聞のわたくしではあるが，つらつら思うに，前記の如く，学会誌は教官各位の研究発表機関であり，試金石の場であるということである。この点が市販のものと違い，売らん哉の意図は毛頭なく，また，洛陽の紙価を高めたいなどという，おおそれた希望はもとより抱かない。だが，この種の学会誌の二，三のものは，研究者が競ってこれを求める程の学問的水準の高い，貴重な文献としての真価を有するものが存在するからには，この城西経済学会誌をして，その列に加えたいという野望をもつことは，強ち高のぞみではないと信じている。いままで発行した号のうちにも，同学同好の心ある士から讃辞を受け，何部かの追送や新たな注文を受けたものもあったが，それはそれとして，この記念号発兌以後に期することは，このささやかな会誌が，われわれの研究発表機関であるのみならず，さらには，同学の人びとが注目の的とするような，水準の高いものとする熱意をこめて発行を続けて行きたいと念じている。

線香花火のような，才気喚発の一時的な力よりも，歩みこそ鈍重ではあるが，ジッとこらえて，一歩一歩前進する努力型の力こそ，尊く，かつ，底の知れない偉力を発揮することを銘記して，今後，さらに十年，二十年を期して，謡曲の文句ではないが，ソロソロと参ろうではないか。

一言蕪辞を述べて序とする所以も亦ここに在る。

昭和50年8月盛夏

武　市　春　男